

序 章 歴史からみる中東政治

本書は、中東政治を歴史から論じた概説書である。「中東」という地域概念が誕生し、そこに現在の中東諸国が形成されていったのは、20世紀初頭のことである。そして、中東で起こる様々な出来事は、世界で起こってきたこと——たとえば、2度の世界大戦やグローバル化といった現象——と相互に影響し合ってきた。

そのため本書では、主に20世紀初頭から今日までの約1世紀にわたる中東政治の歩みを、国際政治との連関のなかで描いていく。歴史という時間軸を縦糸に、世界という空間軸を横糸にとり、中東政治の姿を織り上げようとする試みである。

歴史のなかの中東

歴史を知ることは、現在を知ることでもある。今は過去と切り離せず、両者は地続きにある。現在の世界で起こっている様々な出来事の背後には、常に歴史が存在している。中東の歴史を学ぶことは、その現在を理解することであり、ひいては未来を考えることでもある。

残念ながら、中東は紛争や独裁が絶えない地域として知られている。なぜこのような悲劇が繰り返されるのか——私たちはそんな素朴な疑問を抱く。そして、その答えもまた「宗教や民族が紛争や独裁の原因だ」といった素朴な理解にとどまることが多い。そしてそれを「中東らしさ」として納得し、自分たちとは異なる他者であることに安心してしまうことすらある。

宗教や民族は、たしかに長い歴史をもっている。そのため、それらを軸に中東の紛争や独裁を説明しようとする姿勢は、歴史的な理解にみえるかもしれない。しかし本書では、そのような見方を「没歴史的」として退ける。というのも、そこには、宗教や民族がいつの時代でも紛争や独裁の原因であるとする固定的な図式があり、時代ごとの変化や蓄積——すなわち歴史——が欠けているからである。

1つ事例をみてみよう。2023年10月に始まったガザ戦争は、パレスチナのガザ地区を拠点とするイスラーム主義組織ハマス（ハマス）によるイスラエルへの奇襲攻撃によって始まった。これに対し、イスラエル国防軍（IDF）はガザ地区への激しい攻撃を行い、深刻な人道危機を引き起こした。

なぜこのような悲劇が起こったのか。当時、多くの人々が指摘したように、ハマスの奇襲攻撃がその原因であるという見方は間違いではない。奇襲がなければ、この悲劇は回避できたかもしれない。しかし、こうした見方には「なぜハマスは奇襲攻撃に踏み切ったのか」という歴史的な視点が欠けがちであった。つまり、パレスチナのガザ地区やヨルダン川西岸地区が、何十年にもわたりイスラエルによって封鎖・占領されてきたという歴史的事実である。ハマスはガザ危機の直接の引き金である一方で、その存在自体が、イスラエルによる長期的な封鎖・占領の産物でもあった。

このガザ戦争の発端を2023年10月7日に限定すれば、「原因はハマスにある」というわかりやすい説明ができあがる。しかし実際には、それ以前の歴史、すなわち19世紀末に遡るパレスチナ問題の発生を知らなければ、ガザ危機のことを正確に理解することはできない。

このように、歴史を知ることは、現在起こっている出来事の原因を的確に捉えることにつながる。単純化された説明に流されず、自分の言葉で中東を語るためにも、歴史を知ることは不可欠なのである。

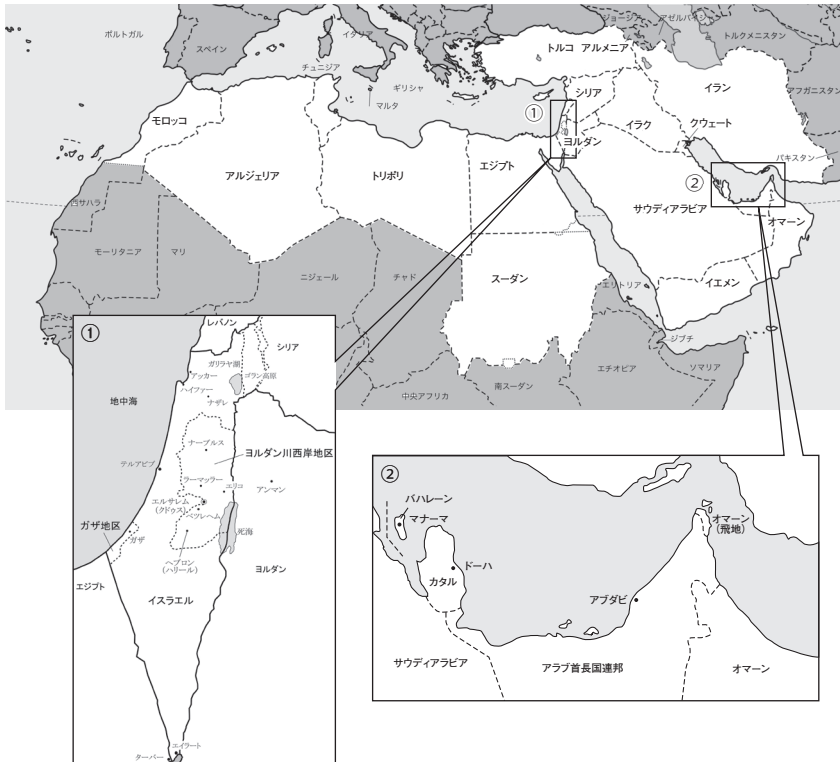
世界のなかの中東

私たちが生きる世界は、それぞれに特徴をもつ複数の地域で構成されている。アジア（東、東南、南、中央など）、アフリカ、ラテンアメリカ、アメリカ（北米）、ヨーロッパなどがあり、本書で扱う「中東」もその1つである。

実のところ、「中東」というのは曖昧な地域概念である。中東とその他の地域を分ける明確な境界線や定義があるわけではなく、それを語る人の立場によって違いが生じる。そのため、第1章で詳しく論じるように、「中東」という地理概念の政治的意味合いや歴史的背景を踏まえることは、中東政治を考えていくうえで極めて重要となる。

本書では、図0-1に示す国々を中東諸国として取り扱う。そこには、分析

図0-1 本書が扱う中東の範囲



注：……は領有権をめぐるア争いが続いており国境線が未確定。

対象を絞るという便宜的な理由もあるが、西は大西洋に面したモロッコから、東はインド洋に近いイランやアフガニスタンまでを中東とするのが一般的な見方だからである。ただし、アフガニスタンについては、日本の外務省では中東第二課の担当国とされている一方で、学界では南アジアに分類されることが多いため、本書では直接的には扱わない。

歯切れの悪い言い方になるが、ここで重要なのは、「中東」という地域概念が、そこで暮らす人々ではなく、私たちのような外部の観察者によって恣意的に定義されているという点である。中東の人々が中東を決めるのではなく、中東の外にいる人々がその枠を定めている。このような「外との関係」は、中東

政治を「世界のなかに位置づける」という本書のもう1つの特徴にもつながっている。

前述のように、中東の悲劇を目にしたとき、私たちはそれを「中東らしさ」として納得してしまうことがある。これは、中東をほかの地域と切り離し、その内部の論理だけで理解しようとする姿勢である。しかし、実際に中東で起こってきたことは、他地域の出来事と無関係ではない。むしろ密接に関係している。たとえば、第一次世界大戦は中東を戦火に巻き込んだだけでなく、その後の国家形成と独立の端緒を開いた。逆に、中東で起きた革命が、アメリカやソ連といった超大国の対立を激化・緩和させる要因にもなった。また、経済面に目を向ければ、中東は今なお世界の石油生産の重要拠点であり、その動静はグローバル経済に直結している。

中東は、世界を構成する1つの地域であると同時に、世界とのつながりの中で発展してきた開かれた地域である。これは本来、当たり前の事実であるはずだが、あらためて意識しないと、私たちは中東を自己完結的な閉じられた地域とみなしてしまいがちである。本書では、こうした認識の癖を問い直し、中東政治の実像に迫るべく、中東で起こる出来事を常に世界のなかで描くことを試みている。

中東で起こることは、世界のはかの地域でも起こりうるし、世界で起こることもまた中東に影響を与える。したがって、中東を学ぶことは世界を学ぶことであり、同時に私たち自身を学び直す機会にもなりうる。

本書の構成と特徴

本書は、第一義的には中東政治の歴史についての概説書であり、この1世紀あまりに中東で何が起こってきたのかを、時代の古い順に記述している。その意味で、本書はオーソドックスな政治史の概説書と位置づけることができる。ただし本書は、中東が世界へと開かれた地域であるという現実を踏まえ、中東政治と国際政治の連関を意識した構成となっている点に特徴がある。

本書は、時代順に3部構成、全11章からなっている。各章では、中東という地域で展開されてきた政治を理解するうえで欠かせない重要な出来事が取り上げられている。しかし、それだけではない。それぞれの時代における中東政治

を理解するための視座も提示しようとしており、その視座は3つの部に対応している。すなわち、「中東政治」が生まれる前段階を扱う第Ⅰ部、「中東政治」の仕組みが確立する時期を論じる第Ⅱ部、そして、グローバル化によってそれまでの「中東政治」が揺らぎつつある現在を扱う第Ⅲ部である。この3部構成は、国際政治の流れとも連動しており、それぞれ概ね、世界大戦期、冷戦期、冷戦後という時代区分に対応している。

第Ⅰ部「「中東政治」前夜——19世紀末から第二次世界大戦まで」では、前近代に中東に存在した帝国群が西洋列強によって分割・支配され、現在の中東諸国が形成されていく過程が描かれる。中東諸国は、この時代に帝国主義・植民地主義の広がりや、西洋を範とした近代化の波のなかで生まれた。

第1章と第2章は、いわば中東政治の歴史を語る前に必要な理論的な準備をする章である。第1章「「中東」地域とは何か」では、中東という呼称自体が、当時の西洋列強の戦略的意図から生まれたものであることを明らかにする。つまり、中東政治を語る以前に、中東という地域概念そのものを再考する必要がある。続く第2章「「中東諸国」とは何か——ナショナリズムと「人工国家」」では、現在の中東諸国が最初から自明な存在ではなかったこと、そしてその形成が中東とその外部との相互作用のなかで進んだものであったことが論じられる。

続く第3章「オスマン帝国の崩壊と中東諸国の形成1——アラブ地域」と第4章「オスマン帝国の崩壊と中東諸国の形成2——トルコ・イラン・イスラエル」では、これらの理論編を踏まえたうえで、具体的な歴史の流れを扱う。それぞれの地域で国家がどのように成立していったのか、その複雑で多層的な過程が詳述されている。

第Ⅱ部「「中東政治」のメカニズム——第二次世界大戦後から冷戦終結まで」では、20世紀半ばまでに独立を果たした中東諸国が直面した国家建設の困難を描いている。ここでも、植民地主義の残滓や、新たに登場した世界規模の冷戦構造といった、地域外の動きとの関係が重要な鍵となる。

第5章「新興国家としての中東諸国——権威主義体制の整備」では、独立後の中東諸国が経験した度重なるクーデタやナショナリズムの高まりを取り上げ、これらが結果的に権威主義体制や社会主義的な経済システムの形成へとつ

ながっていった経緯を描く。

第6章「パレスチナ問題とアラブ域内政治」では、この時期に深刻化したパレスチナ問題の展開が中心となる。第二次世界大戦後に誕生したイスラエルが、アラブ諸国の国家建設や外交政策にどのような影響を与えたかが明らかにされる。

第7章「冷戦構造下の中東と国際政治——同盟の再編」では、冷戦という世界的な枠組みと中東政治との相互作用が主題となる。中東諸国は米ソ両超大国の影響を受けつつも、ナショナリズムや革命を通じてそれを利用したり、時にかわしたりしていく。そして、1970年代末以降に起こる「イスラーム復興」により、中東諸国はより自律的な行動をとるようになった。これを扱うのが第8章「宗教復興とイスラーム主義の台頭」である。ここでは、東西いずれの陣営にも属さない「第三の勢力」としての中東の浮上が示される。世界的な宗教復興の動きのなかから台頭したイスラーム主義は、独裁や紛争、低開発が横行してきた中東政治に変革のうねりをもたらすと同時に、過激派やテロリズムという新たな問題を生み出した。

第Ⅲ部「「中東政治」のグローバル化——冷戦後から現在まで」の鍵は、冷戦終結後、世界が加速的に一体化していく過程である。人、モノ、カネ、情報が国境を越えて行き交う現在において、中東政治は世界と切り離されては存在しえない。むしろ、グローバル化のなかで中東政治と国際政治の連関は、より密接に、そして複雑になっている。

第9章「ポスト冷戦期の中東とアメリカの関与」では、冷戦後の中東が「唯一の超大国」となったアメリカの行動によって大きく規定された様子が描かれる。アメリカは、自国の利益を最優先に掲げ、軍事介入や「対テロ戦争」を展開し、中東政治を不安定化させていった。

第10章「「アラブの春」——「尊厳の政治」から再び「権力政治」へ」では、そうした不安定な状況のなかで、人々が自らの手で未来を切り開こうとした「アラブの春」の運動が取り上げられる。しかしその希望も、冷厳な国際政治の現実には翻弄され、結果として中東政治の混乱はいっそう深まっていく。

最後の第11章「中東をめぐるグローバル化による分断と統合——開発・資源・格差」は、20世紀初頭から続く歴史の「さしあたりの終着点」としての現

在を掘り下げる試みである。そこでは、石油取引や移民・難民の移動、さらに貧富の格差や気候変動といったグローバルな問題と中東との接点が見られる。中東が紛れもなく世界の一部であることが、あらためて明らかにされる。

こうした3部構成が前提とする中東政治を理解するための基本的な視座——すなわち、植民地主義、冷戦構造、そしてグローバル化——は、本書のオリジナルではない。むしろそれは、中東政治学という学問分野において、広く共有されてきた歴史の見方である。その意味で、本書の構成や叙述の「確かさ」は、編者や執筆者の独断に基づくものではなく、学問的な集合知に裏付けられているといえる。

冒頭でも述べたように、本書はこれから中東政治を学ぼうとする読者に対して、古い時代から順に歴史的な出来事を伝えていくことを縦糸としつつ、それぞれの時代を理解するための地域を越えた横糸としての空間的視点をあわせて構成となっている。特段重要な概念や出来事については、複数の章で登場することもあり、記述が重複しているようにみえるかもしれない。しかし、読者には、各時代の中東政治の特徴を掴むための視座を学ぼうと不可欠な記述として理解してほしい。

それでは、早速本論に入っていこう。